

蒔かぬ種の芽は出ない

二〇二三年春、中学を卒業した子たちとたわいもない話をしていたとき、ふと三年前の出来事を覚えていたことが分かり、胸があたたくなくなった。

三年前の二〇二〇年春。新型コロナウイルスにより、全国一斉に臨時休校となった。その「せい」で夏休みはほぼなくなり、暑いなか登校する毎日が続くことになった。思い立った私は、せっかくだから、と先生方に一つの提案をした。毎日おこなっていた朝の学習を取り止め、八月六日だけは全教室で「広島平和記念式典」を観よう、と。ヒロシマから遠い地で、原爆への意識が高いとは言えない。毎年継ぎされていても、「敢えて観る」という話はなかなか聞かない。個人的には機会があれば観せてきたし、話もしてきた。だから、こんないい機会はない、と思った。

八月六日、朝。何も言わずとも、その厳肅さゆえか、

子どもたちは静まり返って教室の映像を食い入るように見つめる。八時十五分直前、「参列者の皆さまはご起立ください」と、会場参列者に向けてのアナウンスが流れると、子どもたちは会場参列者でもないのにその場で立ち上がる。そして、「黙とう」と言われると、静かに黙とうをはじめめる。その一部始終を見ていて、嬉しい気持ちだが、静かな感動となって押し寄せてきた。

機会がある限り、毎年この日は式典に参列してきた。そのたびに、この場に子どもたちを連れてこられたら、と思い続けてきた。この厳肅さを感じてほしかった。新型コロナウイルスの「おかげ」で、オンラインではあるが平和記念式典に参加することができた。卒業した子たちは、そのことをちゃんと覚えていたのである。種は蒔いてみるものである。

修学旅行の「行き先」

新型コロナウイルス感染症が5類となり、社会経済活動が戻りつつある。しかし、元に戻ってはいけないこと



や、元に戻れないこともある。新型コロナウイルスやロシアのウクライナ侵攻などによる世界情勢の不安定化は、物価高をまねいた。これはまだまだ元に戻りそうもない。それは旅行業界にも反映された。修学旅行にかかる費用が、コロナ禍以前に

比べ割り増しているのである。結果、それまで平和学習に絡めて訪れていた沖縄を断念せざるを得なくなってきた。旅行費用は、生活保護世帯の負担を考慮し、支給される額を上限にして設定されることが多い。行き先を変えればいいじゃないか、という声が聞こえてきそうだが、そこで懸念されるのが、その「行き先」である。

私が小学時代の担任は、戦争体験のあるおじいちゃん先生だった。折にふれ、戦争体験の話をしてくれた。私たちの世代が、戦争体験の話を直接先生から聞いた最後の世代でないかと思う。そんな私たちの世代が、修学旅行先を頑なに、ヒロシマ、ナガサキ、オキナワへと向かわせた。そんな流れのなかにいた若い現場教員も、修学旅行を通して平和学習にふれてきた。しかし、現在の情勢がそれを一変させた。私たちの世代は、定年退職を迎えつつある。この先も、平和学習の必要性和大切さは守られていくだろうか。行けないなら「行き先」を変えればいいのか、が平和学習を遠ざけはしないだろうか。

平和の砦

教育現場で働く者として、私が子どもたちの生活のな

かで「経済」について懸念するのは、その暮らしぶりもあるが、それよりも、「だから学力を上げよう」と、学力に追い立てる空気感の方である。無論、旗を振っている本丸は、国であり、文科省である。何かと順位をつけて煽るマスコミの責任も重大だ。学力が大切でないとは言わない。だがその結果、もっと大切な学びから目を背けざるを得ないような状況に追い立てられているように感じる。

なぜ学ぶのか、と子どもたちに問うことがある。多くが、「高校に行くため」と答える。ではなぜ高校に行くのか、と問うと、多くが「大学に行くため」と答える。なぜ大学に行くのか、と問うと、「いい仕事に就くため」と答える。いい仕事とは、と問うと、「給料のいい仕事」と答える。「勉強ができる」は聞こえがいいが、「金目当て」となると、途端にいやらしさを感じる。つまり子どもたちのなかではつきりと、学力と経済力は結びついていて、経済最優先の思想にどっぷり浸かっているということだ。経済を蔑ろにしていると言っているのではない。私も生きていくための経済は必要だ。ただ、学力や経済が最優先となれば、結果として他を貶めていることを知るべきである。まだまだ「誰一人取り残さない」社会とはなり得ていないのだから。

平和学習は、学力最優先という愚策によりバランスを欠いている。そこに、北朝鮮、中国、ロシアが怪しいと、本当かどうかわからない報道により、防衛力増強がいつの間にか正当化され、敵基地攻撃まで当たり前のような意識が刷り込まれている。「この道しかないんです」と洗脳的な声すら聞こえてくる。本当にそうだろうか。冷静に捉え、もつと別な道を考えてもいいのではないだろうか。

いま、平和の砦としての平和学習が、学校現場から消えていく可能性がある。読者の皆さんの多くが、保護者であり、地域社会に暮らしているのである。ぜひ、地元にある学校へ、平和を願う皆さんの声をあげていただきたい。これまで守り抜いてきた先人の声を消してしまわぬように。今を生きる私たちが、未来を担う子どもたちの芽をつぶしてしまわぬように。目にも鮮やかな新緑の若葉が、これからも力強く芽吹いていけるように。

(よしなり ただし)